

マングローブ生態系に学ぶ

第4回：オマーン国における開発調査業務

国際耕種は、オマーンで2002年より実施されているマングローブの再生・保全・管理についての開発調査に参画している。すでに、2000年よりマングローブ植林のためのJICA長期専門家として弊社社員が現地担当機関である地方自治・水資源・環境省へ派遣されており、今回の調査はこの専門家の協力を得ながら実施されてきている（前月号参照）。

調査の目的は、現地での既存マングローブ林の現況やマングローブ森林機能を自然環境及び社会経済学的特徴に基づき調査を行い、調査サイト毎の計画、実施関係者の能力育成プログラム、住民のための啓発プログラム等を含むマスタープラン策定を行うことである。調査では16サイトにおける21の入り江（現地ではKhawrと呼ばれている）を調査対象地域に選定し、地形・土壌・水質・水文などの自然環境、および土地利用・沿岸域の経済活動（水産・観光等）・歴史的価値などの社会経済状況の把握を行い、マングローブ生態系の価値の評価がなされた。このような調査で得られたサイト毎の情報を技術仕様書として整理する一方、これまで現地側で実施されてきた植林技術をガイドラインとしてとりまとめた。調査対象サイトにはマングローブ林が存在する場所としない場所が選定されており、これらの各Khawrは自然環境、森林機能、住民の参加・歴史・民族的関わり、さらには行政面での関わりなどの観点から類型化がなされ、この類型化に基づいた再生・保全・管理計画が策定された。

現在、オマーンのマングローブ林の総面積は約1,100ha程度であり、それほど広くはない。しかし、マングローブ林はこれまで燃料、家屋や船の建材、家畜の飼料など直接的な利用と同時に、間接的には水産資源の涵養地、養蜂の場として利用されてきている。また、近年では観光資源、住民のレクリエーションの場所としてもその重要な資源と見なされている。

本計画では限られた16サイト・21Khawrを対象に調査が行われてきたが、オマーン国内の海岸線にはさらに多くのKhawrが点在している。これらKhawrの今後の開発・利用方法として、今回の調査結果から提言された類型別による沿岸域の利活用法に基づいた計画が随時立案されることになろう。さらに、本調査で実施されたマングローブ林の生態調査や周辺環境調査はモニタリングシートとしてまとめられており、今後も現地側により継続調査が実施される予定である。最近、オマーンの沿岸域では赤潮・青潮の発生や港湾建設に伴うと考えられている沿岸の堆砂・浸食など環境問題が多く発生してきている。沿岸域環境を守るため、マングローブ林は大きな役割を担っているが、これら環境問題とも大きく関わりを持っている。

幸い、オマーン政府はマングローブ林資源ばかりでなく、沿岸域の資源の調査や確保のための情報センター構想を持っており、調査のための人材確保とマングローブ林の価値の重要性を住民へ啓蒙させる活動を継続しようとしている。今回の調査成果が、今後のこのセンター構想に活用され、マングローブ林の拡大とその価値を一人でも多くの住民が理解できるようになることが、本調査の成果と考えられる。



マングローブ林遠景 (Bandar Khayran)



マングローブ林内 (Mahawt Island)



植林可能性調査 (Khawr Quq)